

中予推進ブロック 研究報告

伊予市立伊予小学校、伊予中学校

1 取組の内容

(1) 小・中連携のカリキュラムの作成

ア 「Hi, friends!」と「Sunshine」の題材の関連性を検証した。

イ 学習内容や目標、指導方法の相互理解を深めた。

ウ 児童生徒の実態や学習歴に関する積極的な情報交換を行った。

エ 小学校の素地を生かし、中1ギャップの解消に取り組んだ。

(2) コミュニケーション能力を育成するための効果的な指導の在り方

ア 児童生徒が学習内容や学習活動に関心や意欲をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする「題材」及び「活動」や「シチュエーション作り」の研究を行った。

イ 児童生徒の発達の段階を考慮し、「楽しく伝える」ことから「正しく伝える」ことへの転換を図る学習指導を行った。

(3) 評価の在り方

ア コミュニケーションを図ろうとする「態度」や「学習意欲」の評価方法の研究を行った。

2 成果と課題

(1) 小・中連携のカリキュラムの作成

小・中連携カリキュラムを作成することにより、お互いの指導内容の系統性が目に見えるようになり、つながりを意識した授業に取り組むように教師自身が変わった。また、小・中間で授業交流を行うことで、指導内容や指導目標の違いや共通点をお互いに認識することができた。この共通理解を通して、子どもたちのコミュニケーション能力の育成に取り組みたい。

(2) コミュニケーション能力を育成するための効果的な指導の在り方

言語材料の精選、提示の仕方、ALTとのTT、ICTの導入により、良質なコミュニケーションの場を児童生徒に提供することができた。また、言語活動の内容や方法を工夫することで、児童生徒が主体的にコミュニケーションを図れるようになった。発達の段階に応じて「楽しく伝える」から「正しく伝える」に転換できた。

(3) 評価の在り方

振り返りカードや評価コーナーの活用をはじめ、評価場面や方法を工夫することにより、児童生徒を励まし、意欲を高める評価につながった。

(4) 今後の課題

1年間の取組を通してよりよい連携が築けたが、今後も体制を継続して指導に取り組む必要がある。また、教材研究や開発に努め、より豊かなコミュニケーションが図れるような授業づくり、評価方法を研究していく必要がある。

3 成果のあった取組事例

(1) 伊予小学校 5年生 Hi, friends! 1 「Lesson 7 What's this?」における授

業実践

本単元は、自分たちの身の回りにある物について、積極的にそれが何か尋ねたり答えたりする活動が中心である。まず、導入では、部分絵カードを見せて“What’s this?”とクイズ形式で尋ねる活動を行うことにより、楽しく単元と出合わせ、学習への意欲をもたせた。次に、身の回りにある物の英語での言い方について、チャンツやポインティングゲームなどを積極的に活用して、楽しく慣れ親しんだり語彙が広がるように工夫したりした。また、eraser や bat など、日本語と同じように同じ発音で異なった使われ方をする語があることなどにも触れ、日本語と英語の類似点から言葉のおもしろさにも気付かせるようにした。単元の後半には、身の回りにある物を尋ねるクイズを児童自身で考えて作らせ、クイズ大会を行うことによって英語で伝え合うことの楽しさを体感させることができた。

本単元のまとめとなる「クイズ大会を開こう」という学習活動では、ねらいを「積極的にクイズ大会に参加し、自分の考えを分かりやすく伝えたり、相手の思いを受け止めたりしながら、英語で伝え合う楽しさを味わう。」とし、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲を高めるために、次のような工夫を行った。

- 自信をもってクイズ大会に臨むことができるように、事前に、より楽しいクイズに改善したり、より分かりやすい英語での伝え方を工夫したりする時間を確保した。
- “What’s this?” “It’s～.” “How do you say ～ in English?” などの表現をチャンツの中に取り入れて、楽しく慣れ親しませ、クイズ大会の中で自信をもって使えるように工夫した。
- 出題したり答えたりする際には、間違ってもよいこと、十分な英語でなくてもよいことなどを確認し、今自分が知っている英語を使ってしっかりと相手に言えるよう励ました。
- 出題する児童は、答えた児童に、「エクセレント」「グッジョブ」「クローズ」「リラックス」などのほめ言葉や励ます言葉を返すようにし、英語を通して、認め合い励まし合う心の交流ができるように配慮した。一方、答える児童には、出題している友達の思いまでくみ取ることができるように、言葉をしっかりと聴くよう指導を行った。
- 英語を言うことに抵抗を感じたり苦手意識をもったりしている児童もいるので、グループ内でペアをつくらせ、その友達と一緒に出題したり答えたりするように工夫した。
- 相手によく伝える工夫として、「はっきりと相手に聞こえる声量で」「ゆっくりと」「ジェスチャー・表情なども使って」「ヒントを工夫して」などを意識させた。

このような指導の工夫を行うことにより、活動の中で互いに教え合い励まし合う姿が見られ、消極的だった児童も、次第に自信をもって進んで英語を言おうという意欲が高まった。「クイズ大会」の題材は、相手意識や目的意識をもって楽しくふれあう中で、自然に英語の言い方が身に付いたり、友達と伝え合う楽しさを満喫したりすることができ、英語でのコミュニケーション能力を育てるのに有効であった。

(2) 伊予中学校 1年生 Program 7 Dilo the Dolphinにおける授業実践

疑問詞 when の用法を導入する授業を行った。小学6年生の英語活動で“When is your birthday?”を学習しているの、それを振り返るとともに、既習の他の疑問詞 (what, where) の扱い方と比較しながらパワーポイントのスライドを利用し導入していった。

内容も生徒が親しみを感じ楽しく学習できるように工夫しながら、パターンプラクティスを十分に行い、定着を目指した。中心となる言語活動では、インフォメーションギャップを利用した仲間探しゲームを行い、生徒が興味・関心をもって活動できる題材と場面設定を用意することで、積極的に伝え合えるように授業を組み立てた。また、学習活動の中にキーワードゲームを取り入れ、小学生のときから親しんできた活動を行い、楽しくすることができた。

参観者からは以下のような感想や意見が出された。

- 中学校英語教育に求められることや豊かなコミュニケーションを図るために必要なことは、単に英語の知識やスキル、中、高の連携から、英語教育の今後の重要性、中学校との英語教育に求められることなどが分かるだけでないということ学んだ。
- 小、中、高の連携から、英語教育の今後の重要性、中学校の英語教育に求められることなどが分かった。英語を教える同じ立場の者として、とても参考になる研究会だった。
- 日頃からの指導が見える授業だった。このような取組を積み重ねることの重要性を改めて感じた。学校全体で本事業に取り組まれている姿勢がすばらしかった。また、深く教材研究されているところを見習いたいと思う。
- コミュニケーションの必然性を授業の過程でどう生み出すのか、デジタル教材の有効活用や、四つの技能「聞く」「話す」「読む」「書く」を統合させた活動の具体例など、大変参考になった。
- 多くの情報（既習事項も含め）をきちんと理解し、きちんと発信できる本校1年生の能力の高さは本当にすばらしいと思う。デジタル教材を上手に授業に取り入れている先生にその取り扱い方をご指導いただきたいと思う。準備も含めてありがとうございました。
- 子どもたちの目線に立ち、子どもたちが伝えたいと思える活動を考えたいと思った授業だった。いつの間にか繰り返している言葉をどんどん増やしておけるよう教材研究に熱を入れていきたい。
- 温かな人間関係に基づく生徒が英語を使ってみたくなる授業を展開していきたいと改めて思った。今後の指導に生きてくる研究会だった。
- 生徒が生き生きと英語を使おうとしていて、普段の言語活動がしっかりと継続されていると感じた。ICTを利用すると、たくさんの量の材料を提示できることや繰り返し練習が容易にできるなどの利点があることに気付いた。英語を難しく考えずに、自然に身に付いていける英語教育はどういうものか、今日の研修でとても参考になった。
- 今日の授業のように工夫された授業を見せていただくと、よい刺激になり、教材研究をもっと頑張らないといけないと思いました。生徒たちの repeat の声が clear で大きかった。